

平成二十四年十月

越中 哲也

長崎くんち今年のみどり(その二十五)

一、はじめに

私の本集に「長崎くんち」の編集をはじめてより、今年は二十五編となる。昨年の「ながさきの空 二十三集」には「長崎実録大成」を引いて「長崎くんち発祥」の事について記しておいたが、昔の奉納踊その他の「くんち行事」の事については、古賀十二郎先生編集の「長崎市史風俗編・第三章の内・諏訪神事」の項を参考にされるとよい。又、くんち奉納踊の各町自慢の傘鉾については「長崎談叢 第五輯」に編集されている林源吉先生の「長崎の傘鉾」を参考にされるとよい。

「長崎くんちの奉納踊」は元禄年間(一六八八)すでに全国的に有名であり、近松門左衛門の名作「博多小女郎浪枕」の中にも長崎くんちを取りあげて次のように記してある。

九月の七日・九日は氏神どんの祭り、本踊いろ、唐子踊いろ、見事なことはん……

然し、寛保三年(一七四三)以後、長崎奉行所では長崎町衆の「くんち奉納踊」に目にあまるものがあつたと見え、衣類は木綿に、風俗を乱す舞踊は禁止、質素を主とせよ等と度々布告を出している。

明治になると再び奉納踊は歌舞伎調のはでやかさを取りもどし、昭和五十四年二月には長崎くんち奉納踊は「国重要無形民俗文化財」に指定され現在に至っている。



昭和2年 今魚町傘鉾

戦後における長崎くんち奉納踊の編成は、原爆後における町制の変化によって戦前における踊町編成とは大いに異なっている。今年の十月七日諏訪社奉納踊りの順は次のよう

に記してある。

○**今博多町** 町名より考えて、先ず本博多町があり、次いで今博多町が作られている。次に「文禄二年(一五九三)博多の人、初めて遊里を開く」(長崎年表)とあり、これが今博多町の始まりであるという。長崎くんちの奉納踊が開始されたのは寛永十一年(一六三四)十月九日であり、この時・今博多町の高尾・音羽の二太夫が初めて「本踊り」を奉納したと記してある。この由緒に因んで今博多町の傘鉾飾りは、玉垣の内に神社を示す御幣と奉納踊の釣太鼓と踊り子が使用する櫓が配してある。奉納踊は本踊の伝統を今に伝え奉納されている。

○**玉園町** 町名は戦後・旧上筑後町を中心に東上町の一部が加わり新町名「玉園町」となっている。この町は旧町名より考えて筑後柳川方面の人達により一六二二年以後ひらかれた街であるとされている。それは上筑後町の山際は全て一六二二年長崎に於けるキリシタン禁教後、筑後方面より進出してきた寺社の遺跡が多く残っているからである。又、この町には昔より史跡迎陽亭があり、七年ごとに巡ってくる長崎くんち「庭みせ」(十月三日夜)の時には同亭の奥座敷に由緒ある傘鉾が飾られ、この夜に限って開かずの石門が開かれ、自由に庭内を拝観できる長崎くんち名所の一つになっていた。奉納踊は昔より「筑後獅子」とよばれる東京系の「獅子まい」がうけつがれ奉納されている。

○**魚町** 現在の魚町は旧今魚町と本大工町・酒屋町の一部を加え戦後つくられた町である。町名を今魚町とつけたのは本来、本魚町があり次いで今魚町が開かれたからである。その本魚町については一六一九年のキリシタン行列の事を記した文書の中に「行列はイオマチを通った」とある事より、そのイオ町こそ本魚町で其の場所は船津町の近くであったと考えられるので、現在の今魚町が開設されたのは寛永末年(一六四四)頃で、中島川に面した場所に新しく開かれた魚市場があつた場所であり、今魚町と新町名がつけられたのである。この町の傘鉾は今年のくんちの傘鉾の中では第一のもので、文

化財にも指定されている長崎を代表するビードロ細工で全てが造られ、製作年代は「嘉永六年丑十二月 丸勢民三郎造(一八五三)」と記してある。奉納踊は町名に因んで川船であり、飾船頭・網打船頭さんの衣装は、共に県指定無形文化財の長崎刺繍でありこれも今年の長崎くんちの見どころの一つである。

○**江戸町** この町のすぐ上の丘には江戸時代長崎奉行所西役所があり長崎港全域を監視し、町の前面には川を隔てて出島オランダ商館があり、其処は当時わが国唯一のヨーロッパ人の居住地であった。そして、出島に行く道は、この町と出島との間に架けられた石橋のみが通路であった。其の故にこの町にはオランダ大通詞家を中心にオランダ貿易関係コンプラ仲間をはじめ多くの商人達も集まっていた。そして町の人達は異国人達との交流も深かった。この故に江戸町の奉納踊には出島カピタンも大いに協力し、カピタン夫妻の乗った花車を中心にオランダ兵隊・オランダ楽隊・オランダの歌まで教えている。そして江戸町の町旗にはオランダ文字がサインしてある。然し残念なことに原爆・終戦のとき其の殆どを失っている。戦後、私は出島の旧家三浦家を訪ねたとき、三浦老が私に「祖父が子供時オランダ兵隊に参加した時のオランダ洋服が残っている」と言われて、長崎市立博物館に御寄贈して戴き、オランダ兵隊さんが歌った歌も教えて戴いた。それは「カーリンデ カーリンデ コクシンデ……」とうたわれた。

○**籠町** 昔は本籠町と今籠町があり、本来は唐蘭貿易の荷造りには必需品であつた竹箆を用意する人達が多かった処であつたのでこの町名となつている。当時の本籠町は、前面は海で海岸には修理場があり右側は舟の修理をする人達が多く居た船大工町、左側は十人町・埋(梅)ヶ崎と人家は少なく、佐古の山ギワ方面には森家支配の菜園があり、また街の最南端であり、野母街道の入口でもあつた。元禄二年(一六八九)菜園の地に唐人屋敷が創設された事により、町は一変し、江戸町と同様、唐人貿易関係者が街に多く集まり町の上には梅園天満宮、大徳寺が創建され、唐人屋敷内には唐船航海安全を祈る土神堂・媽祖堂も創建され、其の祭礼日には蛇踊・唐人踊が賑やかに開催されている。この蛇踊、媽祖行列が唐館内の人達の援助もあつて、寛政年間(一七八〇)以来の本籠町の奉納踊に奉納されている。天保十年(一八四二)の記録に「唐船主王氏本籠町に唐楽器銅羅、太鼓他、唐服多数、熨籠大小六十、唐沓・唐足袋等多数寄進」とある。現在は、「龍踊」と記してあるが戦前は「蛇

踊」と記し伝統民俗文化財に指定されている。

○本年も「長崎くんち」奉納踊解説としては恒例により「(有)呂紅」より山下寛一編集の「長崎くんち」が発刊されているのでお読みいただくとよい。

(有)呂紅 電・八二二〇一六〇

風信

○古語に内憂外患・四面楚歌とある。竹島・尖閣諸島、各国との国交、いつたいどの方向に長崎県民は軸をおいたらよいのでありましょうか。

○それにしても、はや、九月は十九日より二十五日まで「お彼岸」であり、二十二日は秋分の日。そして秋は実りの節として行事が多い。

○其の秋における長崎の最大の催しが「おくんち」ですと長崎の人達はいう。長崎くんちの由緒については前回にも記したが、長崎の人達は、あのくんちのシャギリの音が聞こえてきたら何はさておき、たまらないと言われる。

○九月より本会では後期講座を左記の通り再開したので、御自由由に御参加下さい。(会費不要 資料代は各自)

一、長崎学講座(毎週月曜午前十時半より)。三日(市民劇場と私)。十日(ご祖先様の探し方)十七日休(祝日)二十四日(長崎の座敷敷)

一、水曜懇話会(毎週水曜午後二時より)竹之下、江口、吉田、田村、山脇の各氏を中心にして。

一、古文書を読む会(第一・第二火曜。十時半より)講師(宮田・川原・両氏を中心にして)

一、長崎の食文化を考えるサークル(第二・第四金曜。午後二時より)脇山壽子・太田靖彦・越中哲也を中心にして。

○今月ご寄贈いただいた書籍

『長崎街道と土木遺産案内』岡林隆敏著

長崎ガイドには必読の書でした。(平成二十二年一月NPO道守長崎刊)

『ボードイン・アルバム』長崎文献社より。長崎の「なつかしいおもかげ」が偲ばれる写真集でした。(長崎文献社刊・二九四〇円)

『いも類振興情報No.112』熊本県大津町西村和正氏より。西村氏は今回「南蛮菓子ハルテ」を寄稿しておられる。とても珍しい

本でした。(東京いも類振興会刊 五〇〇円)
『西日本文化No.456』檀一雄生誕百年・食の旅人」等あり(西日本文化協会刊)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 二F

